

## 解答

- 一 問一 A 構 B 捨 C 練 D 垂直 E 反 F 届 G 区域 H 許 I 方形  
J 境目
- 問二 二人でキャッチボールをしているところに、自分より上手な友人達が加わり、ボールに触れる回数が少なくなること。
- 問三 近所の住人に迷惑をかけないように気をつかうこと。
- 問四 X 友人とキャッチボールをする  
Y 跳ね返ってくるボールが顔の横にかかったグラブにすっぱり収まる
- 問五 そのいびつ
- 問六 消えたトカゲのいた方向にボールがそれたために、跳ねたボールが思わぬ方向に飛んでいったということ。
- 二 問一 橋脚のコンクリートに叩きつけられるかもしれない危険な状況。  
問二 橋脚と橋脚との間の細い流れのところをうまく通らなければならぬことからくる緊張感のため。  
問三 自分と同じように強風とたたかっているカワセミの姿に励まされ、新たに力を得たから。  
問四 風に流されないで、自分の力で岸に近づく(「ことができればよい。」)  
問五 チューリップの小さな芽吹き  
問六 E  
問七 近所の山歩きをしながら埋め込んだ球根が、時期が来て花を咲かせているかどうかを確かめ(「ながら歩くこと。」)  
問八 岸辺のチューリップは誰かが植えたものだということ。
- 三 問一 家族みんなに読まれた後なので、新聞が少し傷んできたということ。  
問二 何かを知るためや調べるために読まれるうちは「新聞」だが、もはや読まれなくなったら「新聞紙」である。
- 問三 お役に立ちます  
問四 a ウチワ b 竹  
問五 風に吹かれて竹の葉ずれの音がするということ。  
問六 涼しい風  
問七 姿を変えながら人に役立つもの

## 解答

- 一 出典は、堀江敏幸『正弦曲線』。
- 問一 「石垣の面は微妙な仰角に反っていて」「方形に切った石を漢字の『品』のように規則正しく組みあげ」あたりは、意味が分かっているとおてはまる語を書けないかもしれない。
- 問二 「一対一だったはずの対話が友人同士の力関係のフィールド内で薄められ」とは、友人同士の力関係によって一対一だったはずの対話が薄められて、「できるだけながく、できるだけ多くボールに触れたい」という思いがかなわなくなることであろう。
- 問三 傍線部の直前の「子どもの遊びではあれ」と、後の「白い土塀を汚すわけにいかないし、を壊すわけにもいかない。で音がぼこぼこと響くから、静かな夕方以降は住人の迷惑になる。」とから判断する。
- 問四 垂直の塀にぶつけたボールはゴロとして返ってくるだけ、玉石を積んだ石垣や野石積み石垣にぶつけたボールはどこへ跳ね返るか分からない。「幼い対話を可能にしてくれる唯一の相手は方形に切った石を漢字の『品』のように規則正しく組みあげ、しかも適度な勾配が必要な切り石積み垣(かき)のみ」とあるので、「幼い対話」とは、キャッチボールをしているように、石垣に向けて投げたボールがきちんと返ってくるということである。空欄Yには「うまくするとボールは水平方向よりもうえに跳ねあがり、をボールは顔の横にかかったグラブにすっぱり収まる」の部分の言葉を利用して書くことよildろう。
- 問五 “秩序”とはものごとを行う場合の正しい順序、それを壊さないようにボールを投げ込めば望む通りのボールが跳ね返ってきていたというのが、「秩序を壊さないよう、をボールを投げ込んでいた」の部分の意味である。では、“歪んだ”とは何か。「歪」の字は“いびつ”とも読むことを手がかりに探せば、「いびつさからしか生まれなかったぐい緊張感」「そのいびつな面」という言葉に行き当たり、上記のような内容の文は「そのいびつな面に」首尾

よく投げ込めば、ボールは期待どおりの位置に戻ってくるのだった。」であることが分かる。

問六 トカゲのせいでわずかにコントロールがくるい、石垣に当たったボールが思わぬ方向へ跳ねたということである。

二 出典は、梨木香歩『水辺にて』。

問一 設問に「簡潔に」とあるから、「へたに近寄れば私などはコンクリートに叩きつけられるのは目に見えていた。」とあるところを“簡潔に説明”すればよいだろう。

問二 前問のような危険な状況にあった筆者は、どこをどうやって無事に「渡り終え」たかを考える。そのときの緊張感を「息を詰めるように」と表現しているのである。

問三 「この強風の中を、まるで自暴自棄のようにまっしぐらに飛んでゆく」カワセミの姿を見て「勇氣百倍」になっただけから、この強風と闘っているのは自分だけではない、とカワセミの姿に力を得たということである。

問四 「自分の力ではなくて、風に流されて」「岸辺に近づ」いていくのが“屈辱的だ”というのだから、問われているような「屈辱的でないようにするためには」、風に流されて岸辺に近づくのではなく、自分の力で近づいたと思えるようにすればよい、ということになる。

問五 「それ」すなわち筆者が岸辺に偶然見た「意外なもの」（『小さな芽吹き』が「忘れられなくて」、数週間後そこをおとずれて見たものは、真っ赤なチューリップだった。

問六・問七 「野生ではあり得ないもの」すなわち人の手によるものを、思いがけない場所で「見つけたときの喜びはひとしお」というあたりから、筆者が「どのようなものに惹かれる」のかが分かる。そして筆者自身も若いころ、そのような「いたずらっぽい」ことを楽しんでいたようだ。

問八 「チューリップの場合、植えっ放しにしておいて、花が咲き続ける、ということはまずない」のに、どうしてこんなところに咲いているのだろう、というのが疑問。誰かがここに植えたのだとしか考えられないということである。

三 出典は、たのみつこの詩二編。

問一 最初は真新しかった新聞（新聞紙）が、家族に順番に読まれていくうちに最初はなかったしわや折り目がついてくる様子を想像する。

問二 「新聞紙」とは「新聞」がその役目を終えたものであるから、新聞の役目を分かりやすく書けばよい。

問三 「新聞」は「新聞紙」になってもいろいろな使い道がある、役にたつということである。

問四 Bの詩は、骨の部分が竹でできているウチワの話。第一連と第三連は、その竹が竹として生えていたときの様子が詠まれているから、「わたし」とは、今は骨としてウチワになった竹のことである。

問五 風に吹かれて竹の葉が出す音を「さやさやと／おしゃべりした」と擬人化している。

問六 夏の暑い日、ウチワで風を送れば少しは涼しくなる。そのウチワがかつては竹として雪のなかに立っていたことを想像すれば、その涼しさも増すであろうか。

問七 新聞にしろ竹にしろ、さまざまな用途がある、つまり、私たちの暮らしのなかで役立っているということである。